

イギリスのドラマ教育の考察 (11)

—— Jonathan Neelands の実践を通して ——

小林 由利子*

Drama in Education in England (11)

Analysis of Jonathan Neelands' Drama Practice

Yuriko KOBAYASHI

Abstract

This paper analyzes the drama practice of Jonathan Neelands. The objective is to clarify the characteristics of Neelands' drama practice. This study found: (1) The role of teacher in his practice is very important. (2) His practice is well-structured in advance but the participants cannot realize it during the drama activity. (3) His drama practice leads the participants to look into themselves through the character. (4) His drama practice requires a teacher's acting and oral interpretation skills. (5) There is the natural flow to his drama practice.

Key Words: Drama in Education, Drama Education, Jonathan Neelands, Drama

1. はじめに

『川村学園女子大学紀要』(2005) 第16巻第2号の「イギリスのドラマ教育の考察 (10) — ウォーリック大学のドラマ教育と演劇教育修士プログラムの検討 —」¹において、このプログラムの主任である Jonathan Neelands²のドラマ活動を検討した。その結果、Neelandsのドラマ活動における、次の2つの特徴を明らかにした。第1に、Neelandsは文学を題材にしてドラマ活動をする場合が多い、ということである。第2に、Neelandsは、ドラマ・リーダーのテクニックとして Teacher in Role を用いて参加者を活動の深いレベルにかかわらせながら、

*教授 ドラマ教育・演劇教育

参加者が自ら洞察するように導いている、ということである。

本論では、Neelands が教育的文脈において、ドラマをどのようにとらえているかを明らかにし、文学作品をドラマの題材にしていなかった活動を取り上げて検討することを通して、Neelands のドラマ活動の特徴をさらに明らかにしていく。

2. Neelands の教育的文脈におけるドラマのとらえ方

Neelands は、教育にかかわるドラマについて、次の7つのとらえ方をしている。

第1に、「ドラマは、疑いの余地もなく、子ども中心の考え方に基づいて行われるべきである」³、ということである。たとえば、「ドラマが、子どもの言語や経験や動機や興味の中に存在するように使われるべきである」⁴、ということである。しかし、Neelands のいう「子ども中心」という意味は、ドラマ活動が子どもだけで行われることを意味しない。Neelands は、ドラマ活動が「子ども中心」の考え方で実施されると「同時に、ドラマの学習は、教師の仲介に依存している」⁵、と述べている。いいかえれば、Neelands は、ドラマ活動は、ドラマ教師の導きにより、子どもたちは自ら行っていると感じられるように実施されるべきである、ということである。学校教育でドラマ活動が実施される場合、教師の指導のもとで、学習内容があらかじめ考えられ、活動自体は「子ども中心」と子どもが感じ取れる形式で実施されるべきである、という考え方である。つまり、教師によって構造化された教室における教育的ドラマ活動である。

第2に、「(教育的文脈において) ドラマは、想像されたことを構築するような演劇的技術の伝達」⁶を活動の目的にしていない、ということである。いいかえれば、Neelands は、舞台上で演ずるための技術を子どもたちに教えることをねらっていない。「ドラマは、子どもが劇を舞台上で上演するためではなく、むしろ子どもが経験すること」⁷を目的にしている、と Neelands は述べている。ドラマは、将来俳優になるために行うことではなく、子どもが、ドラマという行為の中で「新しいアイデア、コンセプト、価値、役割、言葉を試したり、実験したりする」⁸こと自体を体験することを目的にしている。すべての子どもが、将来俳優になるわけではない、しかし、想像された空間で、現実世界をよりよく理解するために、これらの経験をすることは、学校教育における子どもの経験において必要なことである。

第3に、「ドラマは、実践であり、感情と即座に結びつく、と同時に知性とも結びつく(ドラマは、科学的に個人的なことと直観的なことを結びつけようとする)」⁹、ということである。そして、「ドラマは、想像された時間—空間—人々を通して、教室での学習に行為という側面

を持ち込む」¹⁰ ことができる、と Neelands は述べている。いいかえれば、机上の学習が主体である教室において、架空の時間と空間と人物をつくり出しアクションという身体的行為を通して学ぶ機会をドラマが提供する、ということである。

第4に、「ドラマは、想像された行為や言葉を通して、現実世界の行動と言葉に対して、模擬体験をしたり、対応したり、人間の意味を創造したり、解釈したりする、という社会的（相互に作用する）方法である」¹¹、ということである。ドラマは、想像世界であるあるけれども、「想像された経験は、ドラマ活動を行う参加者に現実世界の質的体験をさせる」¹² ことができるのである。つまり、ドラマという想像世界は、参加者にリアリティーを感じさせることができるのである。要するに、虚構世界における「真実」の体験である。

第5に、「ドラマは、適切に示されれば、学習者に対して有効な活動的過程と見なすことができる」¹³、ということである。ドラマは、「教科あるいは教育課程の一部として扱われていない」と Neelands は指摘し、彼はこのことをマイナス要因としてとらえていない。むしろ、「美術や造形の素材が使われるように、ドラマを教室の一つの資源」¹⁴ として積極的に学校教育に位置づけようとしている。たとえば、ドラマを教科のための媒介、問題解決のための機会、教科をより深く理解するための学習媒体などとして使用することである。

第6に、「ドラマは、専門家あるいは、ホール空間だけで実施されるものではない（しかし、ドラマは疑いの余地もなく両者によって発展させられる）」¹⁵、ということである。Neelands が、ここで述べたいことは、「すべての教師たちにとって、どのような場所であれ、ドラマをすることが可能である」¹⁶ ということを示すことである。つまり、誰でも、どんな場所でもドラマを使うことができる。しかし、教育においてドラマ活動を深めていこうとすれば、教師にドラマ活動を実施するための技能や経験は必要になるし、適切な場所も求められるようになる。あくまで、Neelands は、学校教育におけるドラマ活動の入口は、誰にでも、どこでもできることを示そうとしている。

第7に、「ある種の強調されたドラマは、連合体の一つの位置を占めている。それは、子どもの遊びに源流があり、演劇という芸術形態に文化的かつ個人的に発展を遂げるという連合体のことである」¹⁷、ということである。別の言葉でいえば、「教師は、子どもが経験を学習するために、演劇という馴染みのない表現形式ではなく、遊びという子どもたちの経験に存在している表現形式に合わせてみよう」¹⁸ ということである。この考え方は、イギリスのドラマ教育の先駆者である Peter Slade の考え方にもとづいていると考える¹⁹。つまり、ドラマと演劇の源流が、子どもの「遊び」にあり、「遊び」がドラマに発展し、演劇へと繋がっていく、という「遊び/ドラマ/演劇」という連合体の考え方である。

以上のことが、Neelandsの教育的文脈における、ドラマの7つのとらえ方である。次に、具体的にNeelandsのドラマ活動を取り上げて検討していくことにする。

3. Neelandsのドラマ活動：「フレデリック・ドラマ」

Neelandsは、文学作品を基にしてドラマを行う場合が多いが、今回の彼のドラマ活動は、ポーランド人であるフレデリック（Frederick）という人物にかかわる切り抜きを組み合わせた資料（図1参照）を基にした活動例である。

参加者は、アメリカのボストン市にあるエマーソン大学演劇学部大学院生23名とエマーソン大学ドラマ教育学科主任教授（Robert Colby）と著者の合計25名である。

一連の「フレデリック・ドラマ」という活動は、一日のドラマ・ワークショップの最後に実施され、6つの小セッションから成り立っている。しかし、個々のセッションは、参加者にあらかじめ知らされていない。つまり、すべて即興で行われる活動である。

「フレデリック・ドラマ」という活動の前に、午前中に3つのウォーミング・アップの役割をもつシアター・ゲームが行われ、午後に「おじいさんの靴」という詩をもとにしたドラマ活動が1時間あった。その後、約1時間半かけて行われたのが、以下のドラマ活動である。

(1)～(6)は、「フレデリック・ドラマ」における各セッションの名称である。

(1) 「わたしたちは、何を知り得るか、何を推し量り、何を知りたいか？」

<活動の概要>

「教師（Neelandsのことである）は、ポーランド人のホロコーストの生き残りであるフレデリックについての資料を参加者に手渡す。参加者は、5名のグループになり、それぞれのグループが、配布された資料から情報として、何を知り得るか、何を推し量れるか、何を知りたいか、という3つのリストを作成する。その後、全員でそれぞれのグループで考えたことを共有する。」²⁰

<考察>

Neelandsは、ドラマ活動のテーマとして、どちらかというと深刻なものを選択する傾向がある。今回は、ホロコーストの生き残りという人物が取り上げられている。実際にグループの中には、親戚がホロコーストで虐殺されたり、生き残ったりした人もいた。そういう状況の中でこのテーマをアメリカで選択するということは、一つの挑戦であるといえる。

PEOPLE
are
FASCINATING

You meet FREDERICK.

He came here in 1946 from POLAND with nothing but a tattoo.

He built a NEW LIFE.

He couldn't have children, not after what he'd SEEN.

ACCIDENT THEN HIS WIFE DIED

He's left alone with the memories of a time when he had NOTHING.

He begins to collect things. OBSESSIVELY. COMPULSIVELY...

The neighbours complain.

YOU explain TO THE NEIGHBOURS that he ISN'T A THREAT.

He's just DEPRESSED... and FRIGHTENED... and LOVELY.

But with help he can get better.

People can be fascinating, mystifying, rewarding. They're never boring. Social work is work with people, it's that simple and that complicated. To find out more about training to be a qualified social worker call for a career booklet on 0845 604 6404, minicom: 0845 601 6121 or visit www.socialworkcareers.co.uk

SOCIAL WORK
it's all about people.

図1 「フレデリック・ドラマ」の配布資料

Neelands は、急に深刻な場面に参加者を導かずに、まず資料を見ることから始めている。この方法は、フレデリックを客観的に見て、考える機会を与えるといえる。図1に示されているように、フレデリックに関する資料は、フレデリックの人生における一部が取り出され、幸福な場面と不幸な場面の両方が選択されている。Neelands のドラマ活動は、フレデリックの人生そのものを再現することではなく、資料から参加者が自分の内面と照らし合わせながら、深く活動にかかわっていくことである。参加者はまず、資料から知り得ることを考える、次に資料から推量し、最後にもっと知りたい、ということ想像するように構成されている。このように段階を踏みながら、フレデリックについて考えることを通して、結局は参加者自身の内面を探るように仕組まれている。つまり、ドラマ教師によってあらかじめ構造化されている活動である。

(2) 「フレデリックのコレクション」

<活動の概要>

「教師は、参加者にフレデリックの家がどのようなであったかを想像するようにいう。参加者全員で考える。そして、教師は、その家のどこかに、たぶんベッドの下に、特別な物を集めた箱がある、と説明する。これらの収集物は、彼が一生をかけて集めたもので、彼の人生を語るものである。つまり、事物が語る人生である。」²¹

「教師は、それぞれの5人のグループにおいて、各グループの一人ひとりのメンバーに、想像しながら、箱の中にある彼の収集物の一つを描くようにいう。たとえば、結婚指輪、死亡記事などである。教師は、それぞれのグループに小さな円になって座るようにいう。教師は、はさみで切り抜かずに、それぞれの参加者が描いたイメージを円の中央に置くようにいう。」²²

<考察>

活動は、図1で示された資料から始まるが、活動の目的は、実際のフレデリックについて再現するのではなく、フレデリックが所持していただろう事物を参加者が、推察することである。ある切抜きに「事故、そして、彼の妻は死んだ。」というプラカードがある。そこから、フレデリックは、結婚していたことがわかるので、箱の中に妻の結婚指輪が入っていることをイメージすることは可能である。あるいは、妻がどのように事故で亡くなったかについての新聞記事があることも想像できる。図1の資料が刺激物となって参加者のフレデリックについてのイメージが、フレデリックについて考えることを通して、徐々に明確になっていくのである。

参加者が25名いるので、25個の物が、箱に入ることになる。これらが、フレデリックにつ

いて考える新しい刺激物になり、参加者を次の段階に導くことになる。つまり、参加者が、相互に影響し合うことになっている。

このように Neelands のドラマ活動は、徐々に参加者が知らず知らずのうちにフレデリックの内面を探ることを通して、参加者自身の内面を探るよう組み立てられていると考える。

(3) 「フレデリックの人生の音」

<活動の概要>

「教師は、誰もフレデリックを知らない、そこで、彼がそれぞれの物に触れたとき、何か音をたてるようにいう。どのような音をたてるのだろうか？ 誰とも話をしないで、各グループの中の一人が、一つの物を取り上げて、音を呼び起こしてみる。そして、作り出した音を徐々に積み上げていくために、取り上げた物をグループの隣の人に手渡す。そして、いろいろ試してみる。変えてもいいし、音に応えてもいい。次々に手渡す。一つの物が、グループを一巡したら、他の人が2番目の物を取り上げて、新しい音を作り出して、同じように回してみる。すべての物が一巡するまで繰り返す。そして、教師は、全員に向かって、自分に最も強くかわりを持たせた物を選んで、壁に向かって一人で座るようにいう。」²³

<考察>

この活動は、事物に音を加えるようになっている。言葉でなく、音にしたのは、最終的にダンスにつなげていうためではないだろうか。つまり、事物に抽象的なイメージを重ねていくことを目的にしているのではないだろうか。グループで事物を回すことで、さまざまな音の可能性を試すと同時に、事物から考えられるイメージを広げていると考える。

最後に一人で壁に向かって座ることで、フレデリックがいた強制収容所を疑似体験する目的があると考えられる。さらに、一人ひとりの参加者が、フレデリックについて黙想する時間を与えるためではないか、と考える。これは、フレデリックについて考えると同時に、参加者が自分自身について考えることでもある。

(4) 「物と音を交換する」

<活動の概要>

「教師は、フレデリックとして次のことを朗読する。『わたしは、強制収容所にいた…寒かった…いつも空腹だった。金網の向こう側に、ある日少女がやって来た…わたしたちのような、しかし、わたしたちのようではなかった。わたしたちは、食べ物を受け取ろうとして、金網か

ら手を伸ばした。最初の日、その少女は何も持っていなかった。でも、彼女は、毎日やってきて、パンを恵んでくれた。彼女は子どもだった、わたしたちは手を伸ばして、彼女からパンを受けとろうとした。だから、今、わたしは、自分の持っている物の中から、彼女にいくつかの物をあげたい。』²⁴

「教師は、参加者を半分に分け、金網を間に挟み、一方から自分の手に持っているものを差し出すようにいい、もう片方にそれを受けとるようにいう。全員が、フリーズする²⁵。そして、教師は、片方の参加者に金網の向こうのそれぞれのの人に物を手渡すようにいい、もう片方の人に渡すときに音を立てるようにいう。全員が、新しい物と音を受け取ったら、全員が歩き回り、それぞれが出会った人と、物と音の両方をお互いに交換するようにいう。」²⁶

「教師は、一人がすべての物と音を渡され、その他の人は自分の物をすべてあきらめなければならぬ、という。一人にすべての物と音が渡されるまで、徐々に円を小さくしながら取り囲むようにしましょう、という。教師は、すべての物と音を渡された人は、音を出しながら、それらを中央に並べましょう、という。」²⁷

<考察>

Neelands のドラマ活動は、教師に朗読したり、登場人物になったりする、ことが求められる。ここが、他の教師がドラマ活動をする場合に困難である点である。Neelands のバックグラウンドが、文学と演劇ということも彼のドラマ活動を特徴づけていると考える。ここでは、文章を朗読することを通して、参加者を深いレベルの活動に導きいれている。

この活動は、壁に対峙したことから、強制収容所と外の世界との出会いになり、フレデリックのコレクションへと繋がっている。Neelands の活動は、個々に行っているときは、参加者に全体のつながりは見えない。しかし、活動を終えてみると、それぞれの活動が緻密につながられていることに気づくようになっていく。ある意味で推理小説を読み進めていくような構造になっている。あらかじめ教師によって緻密に組み立てられた計画により活動が実施されているにもかかわらず、参加者は動かされているという感覚を持たず、活動自体に自然な流れが生ずるのが、Neelands のドラマ活動の特徴である。

同時に、物を何も持てなかった強制収容所とフレデリックのコレクションという対比が、劇的な瞬間をつくり出している。事物を渡すという象徴的な劇的場面に着目することにより、参加者がさらに深くフレデリックの世界に入り込んでいくことができる。これが、同時に参加者に自分自身について考えさせる機会、つまり洞察を導き出すと考える。

(5) 「物という文脈」

<活動の概要>

「各グループは、部屋の中央においてあるフレデリックのコレクションから、一つの物を選ぶ。そして、各グループは、フレデリックがその物を受け取る前の瞬間の静止イメージをつくる。」²⁸

「そして、グループ1は、グループ2の創作したイメージを基にして、つくり出してみる。グループ2は、グループ3が創作したイメージを基にしてつくりだしてみる、というようにそれぞれのグループが創作していく。各グループは、インプロビゼーションをもとにしたイメージを使う。創作する場面は、オリジナルのイメージを含むインプロビゼーションを使う。」²⁹

<考察>

この活動は、事物に着目しながら、参加者が劇的瞬間をグループで探すようになっていく。そして、グループがお互いに見せ合うことで、イメージを広げ深めるために刺激しあうように構成されている。さらに、一つのイメージから、次のイメージに移行する体験を参加者がしている。

(6) 「希望と絶望のダンス」

<活動の概要>

「教師は、フレデリックの人生が希望と絶望の入り乱れていることを全員に示唆する。各グループは、彼の人生におけるそれぞれ3つの希望と絶望の瞬間を選び出し、合わせて6つのイメージをつくり出すようにいう。そして、それらのイメージは、変わり目に注意を払いながら、希望と絶望が代わる代わる、現れるようにする、という。そうすると、一つのイメージが現れ、もう一つのイメージが消えてくようになる、それは、まさにダンスのように、という。各グループが作り終えたら、お互いに見せ合う。そして、そのことについて話し合う。」³⁰

<考察>

この段階になると、参加者は様々なフレデリックについてのイメージが広がり深められていく。フレデリックという人物と彼の人生が、グループの共通理解として創り上げられている。同時に、5人のグループは、一連の活動を通して、グループとしての関係性を発展させている。

Neelandsは、6つの場面をつなぎ合わせていく活動の間、ダンスを導き出すような音楽をバックグラウンド・ミュージックとして流していた。この音楽が参加者を刺激して、場面と場

面のつながりをスムーズに移行させるようにしていた。著者のグループには、実際にユダヤ人の参加者がいたので、フレデリックの結婚式の場面は、本当のユダヤ教の結婚式の儀式が取り込まれた。さらに、結婚式の後のレセプションでは、ワルツを踊るようになった。非常におもしろいことは、今まで積み上げられてきたことが、この活動で一気の一つにまとめられていく流れが生じたことである。フレデリックの喜びや悲しみが、他人事ではなく自分の中に引き寄せられ、自己に反映されているのである。つまり、フレデリックという人物を介して、自分自身を洞察する体験になっている。

4. おわりに

Neelands のドラマ活動は、非常に緻密に組み立てられているにもかかわらず、参加者は、ほとんどそのことに気づかずに、活動に入っていく、徐々に深い部分に入れられていくことである。最終段階は、参加者が知らなかった領域に踏み込んでいて、活動が終了すると、自分でも気づかなかったことを発見するということを活動の中で経験してしまう、ということになる。それは、参加者にとっての新しい自分の発見、あるいは自分では気づかなかった自己の深層部分との出会いでもある。今回の Neelands のドラマ活動は、フレデリックという人物を媒介にして、参加者が自己を洞察するようになっていたと考える。

今後は、さらに Neelands のドラマ活動例を取り上げて、彼のドラマ教育の方法論について明らかにしていきたい。

注

- 1 拙著、「イギリスのドラマ教育の考察(11)―ウォーリック大学のドラマ教育と演劇教育修士プログラムの検討―」、『川村学園女子大学研究紀要』、第16巻、第2号、2005、pp.1-11.
- 2 Jonathan Neelands (1952～)は、イギリスのウォーリック大学教育学部ドラマ教育と演劇教育の主任である。イギリスの Drama in Education のリーダーである。Neelands は、Northamptonshire の英語とドラマの指導主事を長年して、多くのドラマ教師の指導を行った。現在は、大学でドラマ教育と演劇教育を教えながら、ドラマを学校のカリキュラムにどう位置づけていくかという実践を行っている。理論に裏づけられた実践を行っているドラマ教師でもあり、イギリス国内だけでなく世界中で講演及びワークショップを実施している。主著は、*Making Sense of Drama: A Guide to Classroom Practice* (1984) である。
- 3 Neelands, J. *Making Sense of Drama: A Guide to Classroom Practice*, Heinemann Educational Books, 1984, p.6.

- 4 Ibid., p.6.
- 5 Ibid., p.6.
- 6 Ibid., p.6.
- 7 Ibid., p.6.
- 8 Ibid., p.6.
- 9 Ibid., p.6.
- 10 Ibid., p.6.
- 11 Ibid., p.6.
- 12 Ibid., p.6.
- 13 Ibid., p.6.
- 14 Ibid., p.7.
- 15 Ibid., p.7.
- 16 Ibid., p.7.
- 17 Ibid., p.7.
- 18 Ibid., p.7.
- 19 拙著, 「イギリスのドラマ教育の考察 (3) — Peter Slade の『Child Drama』の検討を通して—」『川村学園女子大学研究紀要』第8巻 第2号 pp.117-131 及び「イギリスのドラマ教育の考察 (5) — 乳幼児対象の『Child Drama』の検討を通して—」『川村学園女子大学研究紀要』第10巻 第2号 pp.119-134 を参照していただければ幸いである。
- 20 Colby, R. "Outline of Jonothan Neelands Workshop", 2002, p.9
- 21 Ibid., p.9.
- 22 Ibid., p.9.
- 23 Ibid., pp.9-10.
- 24 Ibid., p.10.
- 25 ある瞬間を決め, そのままポーズしていることである。タブローともいう。
- 26 Colby, R. "Outline of Jonothan Neelands Workshop", 2002, p.10.
- 27 Ibid., p.10.
- 28 Ibid., p.10.
- 29 Ibid., p.10.
- 30 Ibid., p.10.

参考文献

- Allen, J. *Drama in Schools: Its Theory and Practice*, Heinemann Educational Book, 1979.
- Koste, V. G. *Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life*, Anchorage Press, 1978.
- Neelands, J. *Beginning Drama 11-14*, David Fulton Publishers, 1998.
- Neelands, J. and Goode T. *Structuring Drama Work: A Handbook of Available Forms in Theatre and Drama* Cambridge University Press, 1990.
- O'Neill C. & Lambert A. *Drama Structures: A Practical Handbook for Teachers*, Stanley Thornes Ltd., 1892.

小林 由利子

Pemberton-Billing, R. N. & Clegg, J. D. *Teaching Drama*, Hodder and Stoughton, 1965.

Slade, P. *An Introduction to Child Play*, Hodder and Stoughton, 1976.

Slade, P. *Child Play: Its Importance for Human Development*, Jessica Kingsley Publishers, 1995.

Wagner, B. J. *Dorothy Heathcote: Drama as a Learning Medium*, National Educational Association, 1976.